



小豆島一日研修 (1年次)



附属学校園訪問 (1年次)



涼夜の華



灼夏の花

香川大学教育学部 附属教職支援開発センター センターニュース

No.13



未来からの留学生 (2年次)



教育実習 (3・4年次)

PICK UP NEWS

2025年度 1年次生の「附属学校園訪問」

1年次生の「附属学校園訪問」が始まりました。1年次生の学校園訪問は、「大学入門ゼミ」の一環として、学校園の基礎的理解を主な目的として実施するものです。

6月2日(月)午前、本年度は附属幼稚園の訪問から始まりました。附属幼稚園高松園舎では、園の概要について講話を聞いた後、初めての保育観察に臨みました。目の前にいる園児たちとの距離感に悩んでいた様子の学生たちも、園児から声をかけられると、やわらかな表情をのぞかせて応えながら、子どもたちや先生方の活動を熱心に観察していました。その後、実習担当の先生が学生の質問に答えてくださいました。

その後、今年度1年次生の附属学校園訪問は、中学校訪問・小学校訪問と続きました。学校園を多様に理解するとともに、学校園教員の魅力を肌で感じ、「私もこんな先生になりたい!」と教職を志す思いを高める契機となれば、と願うところです。



- ◆センター長あいさつ/令和7年度 附属教職支援開発センター 事業計画/令和6年度 センター日誌 2
- [特集] 学部教員と附属学校園教員の協働による研究活動 3
- 学部教員と附属学校園教員の協働による研究活動 研究グループ報告 3~5
- ◆令和6年度 教育実践集中講座 実践報告 6
- ◆交流教員から見た 学校教育教員養成の 今・これから/令和6年度 国立大学教育実践研究関連センター協議会 報告 7
- ◆附属坂出小学校 合同研究集会報告 8
- ◆附属学校園 この1年 ~2024~ 9~12
- ◆教育実践総合研究 (第52・53号) 原稿募集 12

センター長 あいさつ

日頃より本センターの事業にご支援・ご協力を賜り、心より感謝申し上げます。

平成30年度より7年間に亘ってセンター長をお務めになった松村雅文先生の後を受けて、本年4月にセンター長に着任いたしました、永尾智でございます。当センターは、これまで松村先生をはじめ多くの方々のご尽力により、確固たる実績と信頼を築いてまいりました。身に余る重責ではありますが、微力ながら当センターのさらなる発展に尽力してまいりますので、何卒よろしくお願ひ申し上げます。

本センターは、センター長、山岸知幸教授と松下幸司教授の2名の専任教員、2名の事務担当職員が中心となって運営しております。また、本年度も客員教授として3名の先生方をお迎えし、学生支援の充実を図っております。

本センターが進める事業は、①実地教育推進部門、②教職支援推進部門、③教員研修推進部門、④教育開発/ICT推進部門、⑤特別支援教育推進部門の5部門です。これらの事業には、専任教員を中心に運営される事業、各種委員会、附属学校園、教職大学院によって展開される事業、特別支援教室「すばる」が展開する事業があり、当センターは、いわば教育学部における教職支援事業の拠点組織、ハブ組織となっています。これだけ多くの事業展開を可能にしているのは、学部構成員の先生方、附属学校園、教職大学院、「すばる」とセンターとの間に築かれ、引き継がれてきた組織力と協働推進力だと思います。

本年度のセンター事業の運営・推進につきましても、引き続きご協力・ご支援を賜りますよう、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。



附属教職支援開発センター長
永尾 智

令和7年度 附属教職支援開発センター 事業計画

1 実地教育推進部門（実地教育に関する管理及び運営）

- (1) 「大学入門ゼミ」「教職概論」（1年次）
- (2) 「教育実践プレ演習」（2年次）
- (3) 「教育実践演習」（事前事後指導）（3年次）
- (4) 「保育・教職実践演習」（4年次）

2 教職支援推進部門（教職支援に関する管理及び運営）

- (1) 教職志望学生への日常的支援活動
・説明会、自主サークルへの支援、願書作成、卒業前対策講座等教授対応
- (2) 教職志望学生及び現職教員への教育相談活動
・進路に関する相談、教職に関わる悩み等相談活動
- (3) 教育実践集中講座の開催

3 教員研修推進部門（現職教員研修に関する管理及び運営）

- (1) 現職教員への研修支援活動
・香川県教育センターとの連携研修
・NITS四国アライアンス（香川大学センター）連携研修
・香川県教育委員会免許法認定講習

4 教育開発/ICT推進部門（教育開発に関する管理及び運営）

- (1) 教材・資料の収集・管理・活用支援
・研究資料の収集・管理、教材・機器等の共同利用のための整備、ソフト等の閲覧貸出
- (2) ICT機器の活用支援
- (3) 研究活動の報告等
・「香川大学教育実践総合研究」の編集、教育実践集中講座資料集等
- (4) 関係機関との連携
・関係機関との連携による共同研究、附属学校園等との共同研究等

5 特別支援教育推進部門（特別支援教育に関する管理及び運営）

- ・教育学研究科、教育学部における特別支援教育に関する教育活動への協力
- ・特別支援教室の運営、業務の遂行
- ・香川県教育委員会、高松市教育委員会、附属学校園、関係諸機関との連携

6 その他

- (1) 広報活動
・ホームページ、センターニュース、パンフレット等
- (2) 学部・大学院関連授業科目及び卒論・修論指導

令和6年度 センター日誌

<前期>

- 4月9日(火) 第1回教育実践プレ演習担当者会議
- 4月10日(水) 特別支援教育実践演習第1回全体指導
- 4月11日(木) 教育実践演習第1回全体指導
- 4月16日(火) 第1回専任会議
- 4月17日(水) 特別支援教育実践演習第2回全体指導
- 4月18日(木) 教育実践演習第2回全体指導
- 4月24日(水) 特別支援教育実践演習第3回全体指導
- 4月25日(木) 教育実践演習第3回全体指導
- 5月2日(木) 教育実践演習特別指導
- 5月16日(木) 教育実践演習第4回全体指導
- 5月18日(土) 教育実践集中講座(第一期1回目)
- 5月20日(月) 教育実践集中講座(第一期2回目・3回目)
- 5月21日(火) 第2回専任会議
- 5月23日(木) 教育実践集中講座(第一期4回目)
- 教育実践演習第5回全体指導
- 教育実践集中講座(第一期5回目)
- 6月1日(土) 教育実践プレ演習第1回全体授業
- 6月5日(水) 教育実践集中講座(第一期6回目)
- 6月10日(月) 第1回編集会議(香川大学教育実践総合研究第49号)
- 6月17日(月) 教育実践集中講座(第一期7回目)
- 6月18日(火) 第3回専任会議
- 6月24日(月) 第2回編集会議(香川大学教育実践総合研究第49号)
- 6月25日(火) 第1回特別支援教育推進部門会議
- 7月1日(月) 第1回センター運営委員会
- 7月16日(火) 第4回専任会議
- 7月18日(木) 教育実践演習第6回全体指導
- 8月30日(金) 第105回国立大学教育実践研究関連センター協議会(三重大学)
- 9月4日(水) 第1回教職実践演習担当者会議
- 9月10日(火) 第5回専任会議

<後期>

- 10月15日(火) 第6回専任会議
- 10月18日(金) 教育実践集中講座(第二期1回目)
- 10月30日(水) 教育実践プレ演習第3回全体授業
- 11月6日(火) 教育実践演習第7回全体指導
- 11月7日(木) 教育実践集中講座(第二期2回目)
- 11月11日(月) 教育実践集中講座(第二期3回目)
- 11月18日(月) 教育実践集中講座(第二期4回目)
- 11月19日(火) 第7回専任会議
- 11月20日(水) 教育実践集中講座(第二期5回目)
- 教育実践演習第8回全体指導
- 教育実践集中講座(第二期6回目)
- 第2回教職実践演習担当者会議
- 11月25日(月) 教育実践集中講座(第二期7回目)
- 11月28日(木) 教育実践集中講座(第二期8回目・9回目)
- 12月4日(水) 第3回編集会議(教育学部実践総合研究第50号)
- 12月11日(水) 教育実践集中講座(第二期10回目)
- 12月12日(木) 特別支援教育実践演習第3回全体指導
- 12月16日(月) 教育実践集中講座(第二期11回目)
- 12月17日(火) 第8回専任会議
- 12月18日(水) 第4回編集会議(教育学部実践総合研究第50号)
- 1月16日(木) 教育実践集中講座(第二期12回目)
- 1月21日(火) 第9回専任会議
- 1月27日(月) 教育実践集中講座(第二期13回目・14回目)
- 2月3日(月) 教育実践集中講座(第二期15回目)
- 2月5日(火) 第2回教育実践プレ演習担当者会議
- 2月12日(水) 第3回教職実践演習担当者会議
- 2月17日(月) 教職支援推進部門会議
- 2月18日(火) 第10回専任会議
- 2月20日(木) 実地教育推進部門会議(メール審議)・
教員研修推進部門会議(メール審議)・
~27日(木) 第106回国立大学教育実践研究関連センター協議会(東京学芸大学)
- 2月21日(金) 教育開発/ICT推進部門会議(メール審議)・
~28日(金)
- 2月28日(金) 第2回特別支援教育推進部門会議
- 3月3日(月) 2024年度学部・附属学校園教員合同研究会
- 3月4日(火) 第2回センター運営委員会
- 3月11日(火) 第11回専任会議

※その他、実地教育科目(1年次「教職概論」「大学入門ゼミ」/2年次「教育実践プレ演習」/3年次「教育実践演習(教育実習事前事後指導)」/4年次「保育・教職実践演習」等)のコーディネート・指導を行いました。



特集 学部教員と附属学校園教員の協働による研究活動

第24回 学部・附属学校園教員合同研究集会を終えて



副学部長（連携担当）高木 由美子

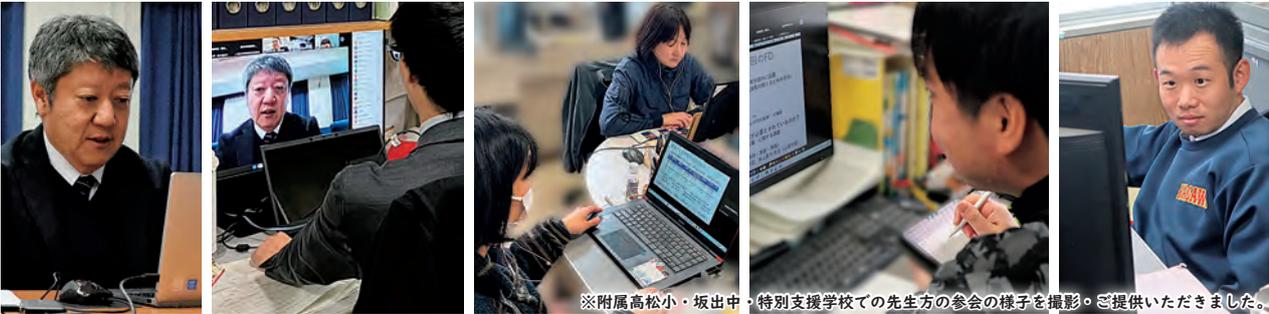
2024年度の研究集会を令和7年3月3日（月）15：00より実施しました。今年度も総務係の藤澤さんをはじめ関係の皆様のご協力のもと無事開催することができましたこと、心より感謝申し上げます。

附属学校園の働き方改革の一環で、2024年の合同研究集会から、Zoom開催と対面開催を1年毎に実施することとし、Zoom開催の年は、就業時間内に会が終了するように計画しました。また、例年、合同研究集会は、教育学部の新人研修FDIに位置付けられておりましたが、本年は全学教職教育委員会からの依頼により教育学部以外の全学教職員にも参加を呼びかけました。

当日は、平篤志教育学部長のご挨拶の後、松村雅文附属教職支援開発センター長に、「香川大学の教職課程の概要と今回のFD」というタイトルで、教職課程概要と広く教員養成への展望、全学の教職課程に関する課題や、FDで何が必要とされているのかについて概説いただきました。続いて、附属坂出中学校長鈴木正行校長による講師紹介ののち、中高生による瀬戸内海の海洋ごみ問題の解決への挑戦～ICTと市民協働による実践が変える解決の未来～というタイトルで山陽学園中学校高等学校、井上貴司教諭による現場の教員の視点を活かした講演を拝聴しました。

井上先生には、山陽学園高等学校地歴部の生徒が、部活動を通して、地域の問題解決を進める取り組み例をご紹介いただきました。先生は、生徒たちには、自ら考え行動に移し、社会と繋がりを持ち、立場を変えて視点を変えることで、多様な経験から校内で学んだことを活用し、社会を動かせる課題解決につながる気付きと学びを深めてもらえるよう仕掛け作りや後方支援に取り組んでおられること、そして、生徒が自ら興味・関心を高め、リーダーシップを自由に発揮できることで、自己肯定感や責任感、やりがい、自己の成長・可能性の向上を実感してほしい、という抱負を述べられました。

集会は、200人近い参加者となり盛会のうちに終わりました。附属学校園と、香川大学教育学部は、様々な機会を活用し、より一層強固な連携教育を進めていきたいと思っております。



※附属高松小・坂出中・特別支援学校での先生方の参会の様子を撮影・ご提供いただきました。

研究グループ報告

※大学教員は、研究代表者のみ記載。以下同じ。



障害の「人権モデル」からみた保育実践に関する研究

松井剛太^{*}、附属幼稚園

本研究では、障害の人権モデルに則って保育実践を検討すると、これまでどのような違いが表れるのかを検討した。社会モデルは、障害を社会によって作られた問題と捉え、その人の社会生活への参加に必要な環境の変更を求めるものとして理解されている。人権モデルは、社会モデルによって発見された障壁をどのように除去したら、障害者の尊厳が保たれるのか、その方針や方向性を検討するものである。幼稚園での事例を検討した結果、いわゆる障害に対応した社会モデルへの意識が対象児の活動参加に対して周囲が過剰に褒め称えるような不自然な現象も起こり得るなど、社会モデルによる支援が人権モデルの視点から再考されるような状況もあることが示唆された。対象児に関わらず、一人ひとりの感情の揺れ動きを意識しつつ、関わり合いを支えていくことの重要性が示唆された。



「誰一人取り残さない」社会に向けた在り方・生き方の探究をめざす中学校公民学習の授業開発 —障がい者の教育権をめぐる法解釈と意思決定を通して—

鈴木正行^{*}、附属坂出中、附属高松中

本研究は、SDGsの「誰一人取り残さない（leave no one behind）」に基づき、障がい者の高等学校入試不合格処分及び中学校特殊学級入級処分の取り消しを求める二つの訴訟を題材として、法解釈と意思決定による法的思考力の育成、加えて「在り方・生き方」の探究をめざす中学校社会科公民的分野の授業開発を行うことをめざした。具体的には、尼崎市立尼崎高等学校入学試験不合格処分取消訴訟及び留萌市立留萌中学校特殊学級（現在の特別支援学級）入級処分取消訴訟を題材として、教育を受ける権利の保障を求め、自らの人生を切り拓くために訴訟を起こして闘った障がいのある子どもたちの行動を通して、学習者が法的思考を働かせながら、人としての在り方・生き方について考えるものである。授業実践は、2025年2月19日～22日にかけて、附属坂出中学校3年生を対象に行った。生徒たちは、裁判官になったと仮定して、原告の訴えを認めるか認めないかをめぐり、個人で判決を考えた後、グループ及び全体の場で真剣に対話的な議論を展開した。



研究グループ報告

令和6年度 教育実践集中講座 実践報告
交流教員から見た 学校教育実践研究連センター協議会報告
令和6年度 国立大学教育実践研究連センター協議会報告

附属坂出中学校 合同研究集会報告
附属学校園 この1年 2024
(附属幼稚園 附属高松園舎)

附属高松小・附属坂出小
この1年 2024
附属高松中・附属坂出中



誰一人取り残さない教育の実現に向けて

坂井 聡^{*}、附属特別支援学校

附属特別支援学校は、障害のある人への理解を深めるために、本校小・中学部と附属坂出学園小・中学校、地域の小学校の児童生徒との交流及び共同学習を行いました。高等部は、作業学習で製作した製品を香川大学や地域の祭りで販売し、様々な人との交流を図りました。

小・中学校との交流では、事前に授業を実施し、本校の紹介や障害の社会モデルについて説明する機会を設けました。交流の前後には「障害理解に関するアンケート」を実施し、障害に対する意識の変化を調査しました。結果から、交流を通じて障害理解が進んだと考えられるため、活動を継続し、充実を図ります。

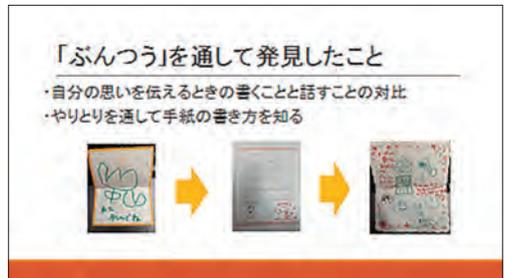
さらに、「誰一人取り残さない教育」をめざし、支援が必要な児童生徒へのよりよい支援を広げ、特別支援教育のセンター的機能の充実を図るために、本校教員に対して特別支援教育の専門性を向上させる研修を実施しました。今後は、研修で得た知識やスキルをまとめ、本校独自の支援パッケージを作成し、地域に発信していく予定です。



幼ー小の学びをつなぐ保育内容の検討：領域「言葉」から

松本博雄^{*}、附属幼稚園、高松園舎

本研究グループでは、幼稚園児と研究協力者である大学生とで、日常の保育を通じて手紙のやりとりを展開するアクションリサーチ「ぶんつうプロジェクト」を6年間にわたり継続してきた。学部専門科目『保育内容の指導法（言葉）』と連動して実施している本プロジェクトでは、その一環として調査終了後に、学生・幼稚園教諭・小学校教諭・大学教員が協働しての成果報告会を実施している（写真：学生作成報告資料例）。2月4日に25名の参加を得て実施した報告会では、昨年度までに示唆されてきた、話し言葉でのやりとりがその後の書き言葉の発達の土台となる点に加え、それとは逆に、対面ではなかなか言葉が出てこない幼児が、手紙で思いを伝えられるケースもまた存在することが見えてきた。幼児期における、実体験を伴う相手とのやりとりが、その後の対話の豊かさにどのように結びついていくか、研究・実践・大学教育をつなぐ本プロジェクトによって、今後とも附属学校園と学部との連携を、幼小連携も視野に入れてより活性化していきたい。



子どもの表現理解につながる「子どもの世界展」に関する試み

吉川暢子^{*}、附属幼稚園

「子どもの世界展」では、子どもたちの作品を単に鑑賞するといった従来型の展示方法や作品展のあり方ではなく親が子どもの表現や作品を理解できるような作品展のあり方を再考しました。親が子どもの表現について理解が得られるように、親子で造形活動を楽しむ体験型プログラムを実施しました。今年度のテーマは「いろとの対話—いろをきっかけにして親子でいろいろななをしをしましょう!—」として、5歳児は「白の世界」、4歳児は「秘密の白い〇〇で遊ぼう!」、3歳児は「いろいろな色で遊ぼう!」といった活動を行いました。また活動だけでなく親を対象とした「子どもの表現」についての講和を行い、活動終了後には、保護者の方との語り合いの時間を設け、子どもの様子などを親同士で振り返りました。親のアンケートから「我が子の作品は、成果物だけを見るとハテナですが、過程を知ると面白く見えました。」など、子どもの姿や声から親の表現理解も広がっていったようでした。



会話可視化技術と音声・文字提示型教材の活用による語り合う授業の研究

浅井哲司^{*}、附属坂出中

本研究は、国語科教育における話し合い指導を、教科書の台本形式の文字教材から実際の話し合いを聞く音声教材へと転換することを目指しています。専用ツールを用いて話し合いのプロセスを計量的に分析し、より効果的な指導法の確立に取り組んでいます。

各クラス9グループの話し合いを録音し、データを自動で記録する環境を構築しました。これにより、グループごとに話し合い直後の振り返りが可能となり、教師のデータ整理の負担も軽減されました。生徒たちは「生の声」を聞き直すことで、より良い話し合い方を自分たちの声をもとに見出し、改善点を発見・実践していきました。特に、教師による「話し合いの冒頭の展開に注目するように」という助言をきっかけに、新たなアイデアが生まれ、改善が進みました。

今後の課題は、教師一人でリアルタイムデータの処理と学習者への直接指導を同時に行う方法の確立です。これにより、児童・生徒一人一人の実態に応じたより具体的な指導の実現を目指します。



AIチャットを活用した教材作成

黒田 勉^{*}、附坂出中、附高松中

近年、AIを巡る開発環境は大きく進歩しており、特にAIチャットと呼称される文章作成ツールの進展がめざましい。このような中、中学校技術家庭科・技術分野の学習指導要領でも、小学校から高等学校に至る情報に関する技術の系統的な学習指導がより高い精度で求めている。

一方、附属中学校では、教員の指導の下で、AIチャットを活用しプログラムのデバッグを行っている事例があり、規約に則った活用方法を検討しなければならない。

そこで、系統的な情報の技術の学習指導の精度を高めるために、AIチャットを活用して教材を開発していく方法と、そのとき発生した問題点を洗い出し、生徒の自学自習に耐えうるようなキーワードの抽出を行っていく。また、生徒に対しては、選択したキーワードによって、生成する文章が変わり、他人の知的財産の侵害にならないようにするための方策を考えていく。また、AIチャットではプログラム作成のほか、画像の生成も可能であるため、「課題の解決のために処理の手順を考えさせることに重点を置くなど、コンピュータを用いた計測・制御に関する技術の目的を意識した実習」のための教材づくりにも活用、作業効率の向上ができなにか検討した。

今回は、AIチャットが生成した「技術家庭科技術分野をイメージした、生徒を中心にした格好いい画像」を生成させ、教材に活用できるか検討を行っている。



中学生が2つの小学校で防犯教室を実施！

大久保智生^{*}、附属高松小、附属高松中

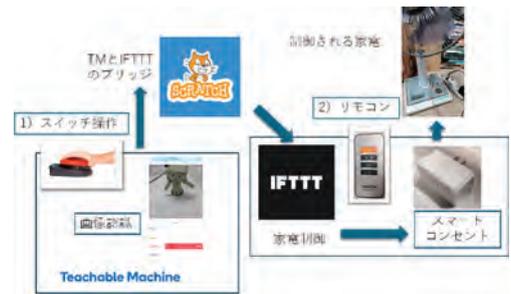
本研究は、犯罪機会論について学習した中学生が2つの小学校で防犯教室を実施し、その教育効果について検証したものです。これまで香川大学では地域の防犯ボランティアと連携して、防犯教室を実施してきました。従来は大学生の防犯ボランティアと地域の防犯ボランティアが連携して、小学校や中学校で防犯教室を実施するという形式でしたが、今回は大学生の防犯ボランティアが中学校で防犯教室を実施し、そこで犯罪機会論について学習した中学生が今度は小学校で防犯教室を実施するという形式で行いました。これは防犯ボランティアが減少している中で、防犯について学習した中学生が自ら教えることで少しでも防犯に関心をもってもらい、将来の防犯ボランティアになってほしいというねらいからです。効果検証では、中学生から防犯について学習した小学生はもちろん、防犯教室を実施した中学生の防犯意識や防犯に関する能力が向上することが示されました。



「技術」における教材提案「未来の住まい：スマートホームの基本と実践」に関する研究

宮崎英一^{*}、附属高松中、附属坂出中

本研究では、中学校技術科において「未来の住まい：スマートホームの基本と実践」という教材を開発した。スマートテクノロジーやIoTの発展により、家庭内の機器を自動化・遠隔操作できる時代が到来している。そこで、実際に生徒がこれらの技術に触れ、仕組みを体験的に学べる教材を構築した。具体的には、GoogleのTeachable Machineを活用し、画像認識による操作や、センサーとマイコンを組み合わせた家電制御の仕組みを導入することで、生徒はスマートホーム技術の基本を理解し、実践的に学ぶことができた。この教材を通じて、生徒は技術を「知る」だけでなく、「使える」「改良できる」力を身につけることができた。また、自ら課題を発見し、試行錯誤しながら解決策を考える活動を取り入れたことで、技術的思考力を育成することができた。さらに、本教材はSDGs目標9「産業と技術革新の基盤をつくろう」とも関連づけ、持続可能な社会づくりについても考えることができるようになった。



責任ある暮らしの実現を目指す家庭科の授業開発ー衣服廃棄の現状調査から

一色玲子^{*}、附属高松小、附属坂出小、附属高松中、附属坂出中

附属高松小学校6年緑組の児童が、高松市庵治町にある「アジサーキュラーパーク」を訪れ、中社長から衣服の廃棄やリサイクルの取り組みについてお話をうかがいました。見学では、私たちが日常的に着ている服の多くが大量に廃棄されている現状を知るとともに、それらを再利用・循環させるための取り組みとして、「服の交換会」やリメイクファッションショーなどの活動に触れることができました。衣服の循環を通して人と人をつなぐ場としての施設の役割にも、児童たちは関心を寄せていました。「誰かの不用品は誰かの宝物」という中社長の言葉から、生活の中にある循環の視点に気づきを得ることができました。また、今年度は大学生を対象に衣服の所持数やお気に入り度、廃棄方法などに関する実態調査も行いました。今後も、持続可能な暮らしとは何か、私たちが果たすべき暮らしの中の責任とは何かについて、衣服廃棄の問題を通して学びを深めていく予定です。



令和6年度 教育実践集中講座 実践報告

太田 隆志・一田 幸子・日下 哲也

魅力のある職業 先生になろう。～夢と笑顔を大切に作る教師をめざして～

第一期
(4～9月)

[第1回] 5月18日(土) 教育法規 「教育法規とケース・スタディ①」(太田) 「教育法規とケース・スタディ②」(一田)	[第5回] 6月1日(土) 教育法規 「教育法規とケース・スタディ③」(太田) 「教育法規とケース・スタディ④」(一田)
[第2回] 5月20日(月) 生徒指導 「生徒指導の実際について」(日下)	[第6回] 6月5日(水) 子ども理解 「『子ども理解』と授業実践・附属学校参観の心がまえ」(太田)
[第3回] 5月20日(月) 道徳教育 「道徳科の多様な授業づくり ～心を耕す道徳の授業～」(一田)	[第7回] 6月17日(月) 学級経営 「学級で育つ子どもたちのために」(日下)
[第4回] 5月23日(木) 教育実習事前指導 「私の出会った教育実習生・教育実習に向けてのメッセージ」(一田・日下)	

プロの教師とは何か? ～教師になるあなたへのエール～

第二期
(10～3月)

[第1回] 10月18日(金) 教育課題の探究① 「日本の学力問題」(太田) 10月18日(金) 教育課題の探究② 「これからの道徳教育」(日下)	[第8回] 11月28日(木) 教育方法と実践 「ICTを活用した授業づくり④」(太田)
[第2回] 11月7日(木) 教育方法と実践 「ICTを活用した授業づくり①」(太田・一田)	[第9回] 11月28日(木) 生徒指導・進路指導 ケーススタディ① 「校務分掌との関連を中心に」(一田)
[第3回] 11月11日(月) 教育の最新事情① 「教師に求められる力」(太田)	[第10回] 12月11日(水) 人権教育 「学校教育における人権教育 ～小学校での取組事例に学ぶ～」(日下)
[第4回] 11月18日(月) 道徳教育 ケーススタディ 「道徳科の多様な授業づくり ～心を耕す道徳の授業～」(一田)	[第11回] 12月16日(月) 学級経営 「学級で育つ子どもたちのために」(日下)
[第5回] 11月20日(水) 教育実習事後指導 「教育実習を振り返って」(一田・日下)	[第12回] 1月16日(木) 生徒指導・進路指導 ケーススタディ② 「いじめ問題との関連を中心に」(太田)
[第6回] 11月22日(金) 校種別による選択実務研修 「はばだけ若き力を生かして ～4月からの心がまえ～」 中学校・高等学校 (一田)	[第13回] 1月27日(月) 場面指導(ロールプレイ) 「多様な対応力の向上を目指して」(日下)
[第7回] 11月25日(月) 教育の最新事情③ 「教育課程と学校評価」(一田)	[第14回] 1月27日(月) 教育の最新事情④ 「学級で育つ子どもたちのために」(日下)
	[第15回] 2月3日(月) 場面指導(ロールプレイ) 「多様な対応力の向上を目指して」(日下)



太田先生



一田先生



日下先生

教育実践集中講座を終えて — 教職の魅力 —

日下 哲也 (日本教育公務員弘済会香川支部支部長/香川大学客員教授)

先日、金婚式の席でご夫妻(全く知らないご夫妻)にお祝いを述べに伺ったところ、その方のお子さんを私が教えていたことが話題となりました。私が新採の頃の約40年前、担任ではなく隣のクラスに体育だけ教えに行っていたことなので??? (言い訳ですが)。お母さんがおっしゃるには、子どもが学校から帰るなり「逆上がりが出来た! 日下先生が教えてくれた。」と言って帰ってきたそうです。それ以来お母さんは人事異動の発表で私の名前を気にとめ、今日も名簿を見たとききっとそうだと思っていたそうです。私は改めて教員という仕事の凄さに身震いしました。その頃の私はがむしゃらで理論も方法もめっちゃくちゃだったと思います。子どもと一緒に学び、遊ぶことで精一杯でした。理想と現実の狭間で、思っていた教員生活との違いに嘆いていました。そんな私でも子どもや保護者の心の隅に残っていました。大げさに言えば、人生の一部を飾らせていただいていた。教職は子どもの未来に携わる職であり、人生の1ページに刻まれる職です。教職とはそれほど重い責任と魅力をもった職業です。

この講座で学ばれている学生の皆さんは、教職の魅力に気づき始めているのではありませんか。教職は決して楽な仕事ではありません。悩むことも多く、変化していく時代に合わせて学ぶこともあり、生涯研修が必要です。でも、教職は多くの子どもたちの笑顔にふれ、喜びに満ちた姿を間近で見ると共に喜び、成長していく仕事。そこには喜びもやりがいも溢れている素晴らしい仕事だと退職してからつくづく思います。受講生の皆さんが私の話を契機として教職について考えていただければ幸いです。

交流教員から見た 学校教育教員養成の 今・これから

教職への一步を応援しながら

中名 紀子（交流教員）



今年度の3名の交流人事教員は、小学校・中学校・高等学校での現場経験を生かした授業を行うことで、学生が教員としての実践的な力を身に付けられるよう努めています。

2年生対象の「学校教育課程論」では、実際に学校現場で行っている校務を体験してもらうことにより、教育を“受ける側”であった学生が、“与える側”の思いに触れ、教育活動の意義について深く考える時間を設けています。先生方の思いに触れることで、教職への興味・関心が広がることを期待しています。

4年生対象の「授業実践論」では、自分が教員になったときに何を大切にしたいかを、模擬授業や集団討論を通じてじっくり考える機会としています。多様な考え方を聞きながら、自分自身の教育観や児童観を明確にしていくプロセスは、教職を目指すうえで重要な一歩です。

現場で求められるのは、子どもたちの考えや行動を予測し、それに応じて自らの働きかけを工夫できる「見通す力」です。これは子どもへの支援だけでなく、同僚教員との連携にも欠かせません。このような力を身に付けるには、教育活動の先を考える視点や、学校現場の実践に触れる経験が重要です。教材研究や指導計画の検討時に、子どもの反応を想定する課題などを取り入れることで、学生が「見通す力」の必要性をより実感できるのではないかと感じています。

学生たちがこうした力を少しずつ育み、教職への一步を踏み出していく姿をそっと応援しながら、交流人事教員として授業に向き合っています。

「オンリー・ワン」の教育観や教師像を見つける支援

大和田 俊（交流教員）



現在、交流人事教員として、教職実践科目、教育実習、教員採用試験に向けた指導等を担当しています。指導にあたっては、学校現場での経験をもとに教育課題に対する現場の取り組みや授業実践における工夫等について具体的に取り上げ、理論と実践の接続に努めています。

これらの授業や支援を通じて実感するのは、学生が「教員になる」という目標に向かって、内面的に成長していく姿です。例えば、模擬授業や教員採用試験の面接練習、ケーススタディを取り入れた教職実践授業の場面では、学生が少しずつ自らの教育観を言語化し、他者と対話しながら省察を深める姿が見られます。こうした取り組みを通じて、学生には、自分自身の教育に対する姿勢や価値観を磨き、自分だけの「オンリー・ワン」の教育観や教師像を見つけていってほしいと願っています。

昨今、教師という仕事の大変さや負担感が大々的にクローズアップされています。その中で、それでも「教師になりたい」「子どもたちのためにがんばりたい」と真剣に考え、努力する学生の姿に、私自身も励まされ、何とか少しでも力になれるよう日々奮闘しています。教員を目指す学生たちが実践的な指導力を身に付け、将来、学校現場に出た時に、自信と希望をもって子どもたちの前に立つことができるように、今後も支援していきたいと思っています。

令和6年度 国立大学教育実践研究関連センター協議会 報告

本年度のセンター協議会は完全対面実施の予定でしたが、第105回については、台風の影響でオンライン（Zoom）に変更になりました。

- 第105回 令和6年8月30日（金）（三重大学）
- 第106回 令和7年2月21日（金）（東京学芸大学）

本年度のセンター協議会も、午前の総会では、体制・運営、会計等に係る審議が行われ、その後、各センターからの報告及び意見交流が行われました。

第106回協議会では、2025年度の役員等、一部決めることができない案件があり、後日メール審議で行うことになりました。センター協議会の独自性また今後の方向性について議論となり、「教員就職への意欲に及ぼす諸要因の検討」（仮題）のもと、協議会をあげての研究への取り組みの提案がなされました。審議の結果、2、3年のプロジェクト研究として進めること、詳細については今後詰めていくことになり、次回の第107回大会で方向性が確定する見込みです。各センターからの報告及び意見交流では、各センターの現状が報告されました。どこの大学も「分化」が進みつつあると再実感しました。その中で、香川大学教育学部の本センターは、部門が増えていますが、土台に学部の実地教育を据えていることが大きな特徴であり、そこに他のセンターとの異なりがあること、またそのことが強みなのではないかと再実感できました。

第105回協議会で予定されていたワークショップは台風の影響によって延期されましたが、第106回協議会で実施されました。協議会会長の須曾野氏によるデジタルストーリーテリングのワークショップです。学校現場でのICT活用時代における先進的な成果・取り組みにふれることができました。教員養成の授業での活用法の可能性を検討していきたいと思っています。（文責：山岸知幸）

附属坂出小学校 合同研究集会報告

6月30日（月）午後、附属坂出小学校において、大学教員との合同研究集会が開催されました。この合同研究集会は、附属坂出小学校が主催し、毎年5～6月ごろに開催している取り組みです。

5時間目、第6学年 理科『植物はどう生きている！？～植物のからだのはたらき～』の授業公開がありました。「客観性のある考察をするにはどうしたらいいか」を確認した上で、色水を吸水させた〔ホウセンカ・ジャガイモ・トウモロコシ〕について、根・茎・葉の染色の様子を班ごとに観察しました。観察結果は画用紙の断面図に記すとともに、個人のタブレット端末のカード上にも記録しました。そして9つの観察結果を繋いで検討し、植物が生きていく体の仕組みについて考察を加えました。既習内容である人の体のつくりと繋いで考える児童や、校庭の大樹に思いをめぐらせ、植物の体のしくみの力強さを感じる児童もいました。

授業公開の後、研究集会が開催されました。本年度は、教育学部教員・香川県教育委員会の指導主事の先生方など、学校外より教育関係者12名の参加がありました。まず、附属坂出小学校の本年度の研究主題「共に学びを進め合う子供の育成～自己調整する方法の習得を目指す授業づくり～」について、研究部の先生より研究説明がありました。その後、公開授業について書き出された2色のコメント付箋紙を整理しながら、授業討議が行われました。本年度は理科や教育実践を専門とする大学教員だけでなく、数学・英語・音楽など、多彩な専門教科の大学教員が研究集会に参加しました。このこともあってか、教員自身の経験や、各教員の専門教科の見方考え方をもとにしたコメントなど、例年になく多様な視点からの意見が交わされ、合同研究集会ならではの討議の機会となりました。

授業後の研究集会においては、討議の折々に、直前まで行われた公開授業において各抽出児童を見取った小学校の先生方が、各児童の状況を横に繋ぎながら学びの様子を共有し、議論を深めていました。理科の公開授業の際、6年生の子どもたちに求めていたことと同様に、附属坂出小学校の先生方自身もまた、「客観性のある考察をするにはどうしたらいいか」を探究し、工夫し仕組みを整えて授業討議を行う姿が印象的な研究集会でした。

（文責：松下幸司）



附属学校園 この1年 ～2024～

香川大学教育学部の各附属学校園より、2024年度の実践研究の取り組みについて ご報告いただきます。

附属幼稚園

附属幼稚園 研究経過報告

研究主題 保育を楽しむ保育者を目指して ～資質・能力を育む状況づくりを探る～

1 研究主題について

子ども達は、元来、身の回りのものやことに自ら働きかけ、その不思議さや面白さを探究しようとしています。そのような子ども達の自ら学ぼうとする姿が、小学校以降の生活や学習につながっていくことを願います。そのために、まず、これまで本園で長年継続してきた事例研究において、遊びを通して育まれている資質・能力や、資質・能力が育つ状況づくりについて詳細に書き起こすことにより、遊びを通じた学びの様相を明らかにしていくこととしました。

2 研究内容と成果

日々の保育記録の中から、特に心に響いた子どもの姿を事例として書き起こし、職員集団でその検討を行うことで、多角的な視野から内面の思いや育ちなどをより深く読み取っていきました。その中で、環境や支援の在り方などが共有されながら、個々が自ら指導の改善につなげようとしたり、個々の保育者のよさや自分らしさへの気付きにもつながったりし、保育の質の向上を図りました。

また、事例研究において、資質・能力の視点から育ちや学びを捉えると共に、そこにはどのような状況づくりがあったのかについても探っていきました。そして、その育ちや学びを整理図にまとめ、分析する中で、以下の『育ちや学びのプロセス』が見えてきました。



- ・子どもの育ちや学びの出発点は、環境や遊びに対する興味・関心や『～したい』と思う心情や意欲、つまり「**学びに向かう力、人間性等**」から始まっている。
- ・子どもは、遊びの中で自ら対象に働きかけ遊びを展開させる。その中で、子どもの心の中にある思いや欲求が表情や身振り、言葉などによって外側に表れることから、幼児の育ちの姿には、**行動面だけでなく情面**も含まれている。

3 今後の研究課題

今は、幼小がそれぞれの教育における支援の意図についての理解にとどまっていますが、研究から見えてきた『育ちや学びのプロセス』を小学校に伝えていながら、接続期における教師の支援の在り方について、共に考えていきたいです。

附属幼稚園 高松園舎

高松園舎 研究経過報告

研究主題 『環境の在り方について考える』 ～子どもとともにつくる・考える～

1 研究主題について

高松園舎の子どもたちは豊かな自然環境の中で生活しており、恵まれた環境を生かして創ってきた遊びや文化があります。教師が「子どもとともに」という視点を持ち、園舎として大切にしてきた育てたい幼児像に立ち還りながら、経験させたいことが保証されるような保育について探っていくこととしました。

2 研究内容と成果

個々の教師が【子どもの主体性を育むことのできる教育内容になっていたか】【環境構成は適切であったか、子どもの思いに寄り添った環境になっていたか】【教師の支援が子どものやりたいことを支えるものであったか】という視点で振り返れるようになってきています。



また、附属高松小学校との幼小連携については、5歳児と3年生との交流活動について研究を進めました。テーマは『多様性を認める優しい心』と定め、幼小の子どもたちそれぞれが自ら課題を発見し、必要感や切実性をもって問題解決しようとするように、自然に遊びが生まれる環境を意図的に設定しました。

5歳児は“受け入れてもらえた”“優しくしてくれた”といううれしさを強く感じ、自分の思いを素直に伝えるようになりました。そして、優しく関わってもらった安心感をもっており、就学への不安は少なく、期待感を膨らませています。

これまでの研究での幼・小の互恵的な関係性に加えて、中学年段階における幼小交流活動の位置付けが新たなひとつの可能性であることが提案できました。

3 研究内容と成果

引き続き、“育てたい幼児像”に還る指導計画の見直しを行っていきます。

センター長あいさつ
令和7年度 附属教職支援開発センター 事業計画・令和6年度 センター日誌
学部教員と附属学校園教員の協働による研究活動
研究グループ報告

研究グループ報告

令和6年度 教育実践集中講座 実践報告
交流教員から見た 学校教育教員養成の今・これから
令和6年度 国立大学教育実践研究関連センター協議会報告

附属坂出小学校 合同研究会 報告
附属学校園 この1年 2024
(附属幼稚園・附属高松園舎)

附属高松小・附属坂出小
附属高松中・附属坂出中
(附属高松小・附属坂出小)

① 研究主題について

本校はテーマを「分かち合い、共に未来を切り拓く子どもの育成」とし、研究を進めてまいりました。これからの先行きが不透明な社会では、価値観や年齢の違い、初めて会った人とも分かち合いながら、未知の問題を解決するために新しい知や価値を生み出すことが必要となると考えます。私たちは、どんな時代、場所、集団においても、夢や憧れをもち自律的に学ぶ力、「ひと・もの・こと」への共感的・協同的に関わる力、問題を解決し、知や価値を創造する力等を発揮しながら、仲間と共に最適解を探っていける子どもこそが、研究テーマに掲げる人間像であると考えています。

② 研究内容について

本校は、令和4年度より4年間、文部科学省研究開発学校の指定を受けました。研究課題は、「個の生活知を豊かにする新領域『経験』と、体験を価値の創造につなぐ「じぶん」の時間を創設し、経験から新たな知や価値をつくる教育課程に関する研究開発」です。

新領域「経験」は、2つの小領域で構成し、異学年集団で活動を行います。

第1小領域の「はっけん」の時間は、教科学習との関係で「あっ」という驚きや気づきが生まれる時間です。この時間では、異学年集団で多様な「ひと・もの・こと」との出会いを通して、学問につながる事象や課題に対する自己の考えの筋道や組み立て（自分なりの論理）をつくることを目指します。「はっけん」の時間でつくった自分なりの論理は、教科学習での知識と有機的につながり、知を再構成していくことに効果的に働きます。

第2小領域の「ちょうせん」の時間は、社会とつながったプロジェクト活動を通して、うまくいかない経験や成功した経験を味わいながら、生き方・在り方につながる思いや願いをもったり、感じ方に気付いたりできるようにします。

また、「じぶん」の時間は、体験をもとに、同学年集団で議論を深め、価値の創造を目指す時間です。価値の尺度が劇的に変化するといわれる不透明な時代の中、他者との協働により、既存の知識や価値から新しい価値を生み出していくといったプロセスは、これからの社会に合った新たな価値創造のかたちになり得ると考えています。

さらに、教科学習では、経験領域で豊かにした経験を生かして、実感を伴った学習内容の理解を図ることで、学習後に身の回りの捉え方がこれまで以上に豊かになると考えています。

これらの成果を、初等教育研究発表会（令和7年2月6日、7日）で公開をいたしました。多くの参会者を得て、地域教育の拠点校として、研究開発学校として全国に発信ができたと考えています。

③ 今後の研究について

新しいカリキュラムのもとで、子どもたちが生き生きと学習に取り組む姿が発信できるよう、成果と課題を整理し、よりよいものになるよう、今後も研鑽を深めていきたいと思います。



【「はっけん」の時間】



【「じぶん」の時間】

研究主題 多様な他者と共に、自ら学びを進める子供の育成（2年次）
～自己調整力を育てる学習の展開～

1 研究主題について

生涯にわたって学び続ける姿が期待される一方で、学ぶことに意義を見いだせず、自分で学ぶことに消極的な子供たちの実態があります。そこで、目指す子供の姿を「自らの目標に向かい、問題を発見して、課題を設定し、諦めずに試行錯誤し、自らの学びを正確に捉え、今後の学習や生活に生かそうとする子供」と設定し、その姿を実現するために必要な力を「自己調整力」として、授業を通して育成を目指しました。

2 研究内容と成果

以下の三つの内容を大切に、授業づくりを行ってきました。

① 子供たちと学ぶ意義や価値を共有すること

本校で設定した五つの自己調整力や学習過程等を子供たちと共有することで、目標を明確にもって学びに向かう姿が見られました。

② 単元や題材構成の工夫

単元や題材の目標を達成する意欲を高める手立てや自ら学びを進める場の設定を行い、それらの手立てを具体化してきました。学習の主体者であることを自覚し、学びを進めていこうとする姿が見られました。

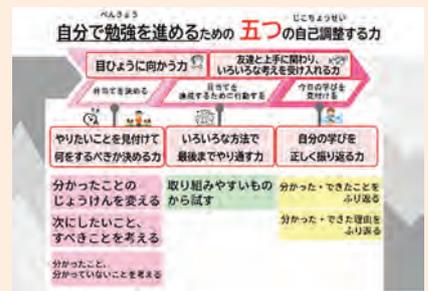
③ 自己調整力を発揮する方法の習得を目指す手立て

自己調整力を発揮する方法を具体化し、その習得を目指すための手立てを行ってきました。最初は自己調整力を発揮する方法を教え、子供が自ら方法を使えるようにだんだんと手立てを直接的なものから間接的なものへと変えていくことを大切にしてきました。教師の指示がなくとも、学びを進めていく子供の姿が見られました。

第104回教育研究発表会においては、約700名の参会者の皆様に、見通し、行動、振り返りの三つの学習過程の中で、自己調整力を発揮して学びを進める子供の姿を見ていただくことができました。

3 今後の研究課題

自ら学びを進めている子供がいる一方で、自分の力だけでは、学びを進めることが難しい子供の姿も見られました。そのため、今後は、自己調整しながら学ぶ過程における他者の役割に重点を置き、互いにやり取りしながら、自ら学びを進めていく授業づくりについて研究を進めていきたいと思います。



自己調整力や学習過程等を共有する際に用いたシート



自ら問題を発見し、学びを進める姿

附属高松中学校

本校の研究について

研究主題 **自らを高め続け、新たな時代に向けて責任をもち行動する人間の育成
—知性と省察性を育むカリキュラムを通して—**

令和5年度より文部科学省から研究開発学校指定を受け、知性と省察性を育む新領域「MIRAI」を設置したカリキュラムの開発、実践を行っています。

○ 教科学習

各教科で育む知性の視点から、現行学習指導要領の学習内容を構造化、体系化して削減したり、指導内容を焦点化、重点化したりして、効果的に知性を育む年間指導計画を作成しました。令和7年度は、作成した年間指導計画を本格的に実施し、その効果を検証するとともに、令和6年度の各教科の成果と課題を踏まえて、各教科が主題を実現するための方略を見直すことで、よりよい教科学習の在り方を模索していきます。

○ MIRAI

令和6年度の成果と課題を踏まえて、協働の学びと個の学びの運用方法を見直し、改善しました。その結果、教科の学びを生かしたり、自己の生き方・在り方を問い直したりする様子が多く見られました。令和7年度は、教科学習で育まれた知性とMIRAIで発揮されている知性との関係を整理し、よりよいMIRAIの在り方を模索していきます。



附属坂出中学校

本校の研究について

研究主題 **生涯にわたって学び続ける生徒の育成（仮）**

1 研究主題について

生涯にわたって学び続ける姿とは、予測困難な社会の中で、他者や自己と向き合う中で、自己を常に更新していく姿である。このように、自己のあり方・生き方を常に問い続けることが「自己の探究」であり、本校のカリキュラムの中核をなすものとする。本校がめざしてきた学びは、自分が変わる学びであり、自己理解・自己形成に資する学びである。

2 研究大会を終えての課題

今年度6月に開催した研究大会では、上記主題のもと副主題を「実感・自己理解としての語りが生まれる情意へのアプローチ」と置き、一人ひとりの疑問やこだわりを大切に、自分なりの考えを持ち、語り合う過程を重視したカリキュラムについて提案した。困難・葛藤を乗り越える場面を授業の中にしかけることで、生徒が学びに熱中・没頭し、その学びが自分にしか経験できない学びとして、意味づけ、価値づけられることも、生徒の振り返りの分析によって明らかになった。一方、熱中・没頭する学びを経た生徒は、本当に自己理解にいたったのか、自己理解とは何なのかについては、今後の課題として残った。

3 今後の研究内容

共創型探究学習CAN・シャトル、語り合いの時間、ものごたりの授業など、本校のすべてのカリキュラムを通して自己理解・自己形成を実感するために、語りが基軸となることに変わりはない。次期大会に向けては、「語られたもの」よりも、語る行為に重点を置く。語る行為には、聴き手が必要であり、語り手と聴き手が相互作用しながら、新たな語りを引き出していくことや、そのような他者の語りを聴くことが、自己理解につながるものと考えている。熱中・没頭する学びの中で、語り、聴き、語り直す。そのような「自己の探究」を支える学習環境を提案したい。



今年度は初めて異学年での語り合いを行った

研究主題 卒業後の豊かな生活を支える支援

～社会参加に向けて特別支援学校の役割を再考する～（2年研究1年次）

1、研究主題について 本校では「豊かな生活」を「尊厳ある人と自ら認め、周囲の人に認められてサポートを得ながら自己選択・自己決定できる幅を広げ、主体的に様々な活動に参加して自分らしく過ごす生活」と定義付け、その実現のために実践研究を行っています。卒業した生徒たちが「豊かな生活」を送るためには、当事者自身が必要な支援を理解すると同時に、社会全体が障害を社会モデルで捉えることが重要だと考えます。そこで、自分のことをポジティブに理解する「自己理解を深める実践」と、周囲の人に特別支援学校の児童生徒や障害のことを知ってもらうための「障害理解に向けた啓発」について研究を進めています。また、特別支援学校として地域におけるセンター的役割を果たすべく、地域の小・中学校や教育機関への支援を強化することもめざしています。

2、研究内容とその成果 各学部でテーマを掲げ、「自己理解を深める実践」に取り組みしました。小学部では、自分の「好き」が分かる、「好き」を見付ける、「好き」を広げる授業実践に取り組み、自己理解の土台作りを行いました。図画工作科「自分の部屋を作ろう」では、様々な材料を用いて、自分の好きなものを制作する造形活動に取り組みしました。さらに、児童一人一人の好きなものをまとめた「大好きブック」の作成にも取り組んでいます。中学部では、自立活動を基盤とした自分を知るための授業実践に取り組みしました。自立活動「フゾクエスト・自分探しの冒険にでかけよう」では、自分や友達の得意、不得意を生かして、協力しながら課題に取り組む学習活動を行いました。今後、生徒一人一人の好きや苦手をもとめた「自分マップ」や「自分ノート（仮）」づくりにも取り組んでいます。高等部では、自分の「気持ち」と向き合う授業実践に取り組みしました。保健体育科「レジリエンスを高めよう」では、ネガティブな出来事が起こったときの対処法や気持ちの持ち方を考え、友達と意見交換をし、レジリエンスを高める学習活動を行いました。現在、キャリアパスポートの内容の充実も図っています。来年度も、「自己理解を深める実践」と「障害理解に向けた啓発」を継続しながら、相互的に取り組むことで、研究をさらに深化させ、インクルーシブ教育の実現をめざした取組を展開していきます。



小学部の授業の様子



中学部の授業の様子



高等部の授業の様子

教育実践総合研究（第52・53号）原稿募集

『香川大学教育実践総合研究』第52号は2025年11月28日（金）原稿受付締切、第53号は2026年5月29日（金）原稿受付締切予定です。以下投稿要領をご参照の上、奮ってご投稿ください。

香川大学教育実践総合研究投稿要領

1（投稿の要領）

香川大学教育実践総合研究（以下「教育実践総合研究」という。）への投稿については、「香川大学教育学部研究報告規程」による他、この要領の定めるところによる。

2（投稿の内容）

教育実践総合研究は、教科教育、教育臨床など広く教育実践に関する独創的な研究論文・実践報告、資料（研究ノート、研究動向の紹介など）及び香川大学教育学部附属教職支援開発センターの活動報告などを掲載する。

3（投稿者）

教育実践総合研究に投稿できる者は、「香川大学教育学部研究報告規程」による他、香川大学教育実践総合研究編集会議（以下、「会議」という。）が特に依頼した者とする。

4（投稿原稿の提出方法）

投稿原稿は、完成原稿とし、原則として電子文書で作成し、印刷原稿2部と、その電子ファイルを会議に提出する。

5（投稿原稿の長さ）

投稿原稿の長さは、刷り上がり12頁（1頁は24字×44行×2段）以内を原則とし、偶数頁になることが望ましい。超過する場合は、会議の議を経て認めることがある。

6（刷り上がり1頁目の形式）

刷り上がり1頁目は、和・英文のタイトル・著者名・所属（所在地）、和文要旨（200字）及びキーワード（5語）を含むものとする。

7（投稿原稿の取り扱い）

投稿された論文等は査読を行い、会議においてその取り扱いを次のいずれかに決定する。査読者については、会議において決定する。

(1) 採録 (2) 条件付き採録 (3) 返戻

8（校正）

校正は原則として3校までとし、投稿者において速やかに行うものとする。その際、印刷上の誤り以外の訂正、挿入、削除は原則として認めない。

附則 本要領は、平成16年4月1日から適用する。

附則 本要領は、平成17年12月14日から施行し、平成17年11月9日から適用する。

附則 本要領は、平成19年4月1日から施行する。

附則 本要領は、平成27年4月1日から施行する。

附則 本要領は、令和3年12月20日から施行し、令和3年6月1日から適用する。

香川大学教育学部附属教職支援開発センターニュース

(No.13)

発行日 令和7年9月1日 代表者 永尾 智

教職のかゆいところに手が届く。

香川大学教育学部 附属教職支援開発センター

〒760-8522 香川県高松市幸町1-1

Tel.087-832-1683 Fax.087-832-1689

http://www.ed.kagawa-u.ac.jp/~j-cen/

